「火吹き達磨」

増山雄三

明治新政府は、慶応四年（一八六八年）三月、政治の基本方針を示した「五箇条の御誓文」を出し、天皇が国の中心である事を強調するため、明治天皇が京都御所の「紫宸殿」で、それを神に誓うという形がとられた。

そして、翌年の明治二年五月には、戊辰戦争も終結したので、藩主たちは土地と人民の支配権を返上する「版籍奉還」を申し出て、それに対し六月に勅許が出され、律令制を模した政府組織も発足したが、問題は「軍隊」で、当初の新政府軍は薩長を中心とした、藩兵の寄せ集めの状態に過ぎなかった。

そこで、長州の「大村益次郎（一八二四～六九）」は、徴兵を前提とした軍隊の創設を主張したが、かたや、薩摩の大久保利通は、藩兵を主体に再編成しようとしたので、両論

を巡る「兵制論争」が延々と続き、ひとまず大村の主張が抑えられたとはいえ、彼は自説の実現に向けて動いたのである。

武士の集団を廃して、藩や身分の枠を超えた「国民軍」という、近代的な軍をつくるという青写真を描いたのが、戊辰戦争を作戦面で勝利に導き、新政府の兵部大輔に就いた大村益次郎だったが、しかし、武士の存在を否定するような構想には、当時、反感を抱く者が少なくなかった。

そんな背景もあり、明治二年九月四日の夕刻、大村は京都木屋町にあった宿の二階で、洋学者の安達幸之助らと歓談していた所へ、刺客たちが刀を手になだれ込んできた。

その時、大村は膝を斬られ負傷したが、暗い部屋の一角で息をひそめていたので、刺客は、裏手の河原に飛び降りた安達を大村と間違えたのか、それを追って斬り付けると、足早に逃げ去っていった。

「サザエの真似をしておった」と、救援の

者が駆けつけた時、大村は風呂場でしゃがみ込んで止血しながら、冗談でそう言ったが傷は深かったので、大阪の難波宮跡にほど近い病院に運ばれ、病院では、シーボルトの娘でかねて親交のあった、「楠本イネ」らの看護を受けたものの、入院から約一か月後、治療の甲斐なく息を引き取った。

捕えられたのは、長州藩などの下級武士らの六名で、彼らは斬奸状で「専ら洋風を模擬し、神州の国体を汚し」と大村を批判しているが、その根底には、武士が否定される事への、強い反発があったのは否めない。

大村の亡骸は、大阪から船で故郷である山口の鋳銭司村に運ばれ、埋葬されたあと、彼の偉業を知った村の人達が協力しあって、三年後、墓の近くに小さい社ながらも、「大村神社」が創建され、昭和になって新社殿ができて、現在に至っている。

昨年、没後百五十年を迎えるにあたり、神社では記念行事を行い、十一月には島根県益

田市多田町の石見神楽を境内で披露してもらったが、多田町は、第二次幕長戦争の「四境戦争」で、大村自らが兵を率いて戦った地だが、戦いの後、彼は敵方を手厚く弔うように、と僧に頼んだという逸話が伝わり、神楽の演目になったのだという。

ところで、大村が襲撃される二か月余り前に、彼は各藩の軍隊を解体し、新たに兵を募る案を示し、京都にやってきていたのは、新しく軍の施設を造る場所選定のため来ていたものだったが、最期を向かえた大阪の病院のあった辺りに立っていると、北方には大阪城を見る事ができる。

死の二か月後に、士官を養成する兵学寮が城の敷地内に開かれ、陸軍創設に繋がっていくが、大村は、「注意すべきは西である」と遺言を残し、その八年後、「西南戦争」で、徴兵制によって徴兵された軍隊が、西郷隆盛が率いる士族を鎮圧する事になるのである。

そんな大村益次郎は、幕末期の長州藩の医

師で兵学者として名をあげ、長州征伐と戊辰戦争で長州兵を指揮して勝利の立役者になったが、新政府では、軍務を統括する兵部省の初代大輔（次官）となり、日本陸軍創設の祖と見なされ、靖国神社の参道中央に像があるのは、このためであるとされる。

彼は、今の山口市鋳銭司で村医だった父の村田孝益の長男として生まれ、十八才でシーボルトの弟子梅田幽斉に医学を学び、のち、大坂へでて緒方洪庵の適塾で医学と蘭学を極め、二十六才になって、父に請われて帰郷して村医となり、「村田良庵」と名乗った。

良庵は、三年間にわたり開院していたが、「お暑うございます」と声を掛けられると、彼が「暑中は暑いのが当然です」と答えたというのは有名な話で、そんな話からすれば、医者としてはあまりはやらなかったようだ。

三年後、黒船来航で蘭学者が求められる時代になり、村田は宇和島藩で蘭学と兵学を教え、樺崎砲台を築くなどしたが、そのあと軍

艦製造研究のため長崎へ赴いたが、その時、シーボルトの娘で産科医をしていた楠本イネを知り蘭学を教え、後年、彼女が大村の最期を看取るという巡りあいになった。

四十才を過ぎ長州に戻った大村は、藩の兵学校教授となり、攘夷の動きに合わせ、軍備関係の仕事をするようになったが、藩内においては、高杉晋作らから、彼の風貌から「火吹き達磨」の綽名をつけられたが、藩が第一次と二次の長州征伐で、西洋式兵制をとり勝利した軍制の指揮を、村田良庵から「大村益次郎」に名を変えた彼に要請したのだ。

大政奉還後の「鳥羽伏見の戦い」を受け、藩主の毛利広封が京へ進撃したのに大村も随行し、官軍の江戸城攻撃案を作成したが、王政復古で新政府軍の軍防方として、各藩からの兵を御所警備兵として訓練し、近代国軍の基礎作りを開始し、明治天皇大阪行幸に際して、陸軍訓練親閲式を指揮した。

明治二年（一八六九年）箱館五稜郭で幕府

残党軍が降伏し、維新が確立し新しい明治が開かれ、大村は兵部大輔となって軍務を担う事になったが、先述した兵制論争で大久保の「**藩兵論**」に敗れた事を、「御一新は旧習を脱し、公家方を武家の風にし、強気にやる様のはずなしつるに、またまた卿とか大輔とか相唱へ軟弱に陥り、追々武家も公家の方に引きつけられるべし」と皮肉っている。

だが、当時の兵部卿（大臣）は仁和寺宮嘉彰親王で、名目上だけの存在だったので、大村が事実上、近代日本の軍制建設を指導していき、大阪に砲兵工廠を設け、建軍の中核を東京から移転させたのは、自身の軍制改革を大久保に妨害されたことに対する、大村の腹いせがあったという。

その「**大村益次郎**」は四十五才で京都木屋町、そしてその十年後、「**大久保利通**」は四十七才で東京紀尾井町で、ともに不平士族によって「**暗殺**」されてしまっている。

令和二年六月